

論文の内容の要旨

論文題目 場の物語論  
氏名 森 正人

本論文は、「場」を観点とする物語論である。物語の発生論であり、また〈物語の場〉を本文化した物語すなわち〈場の物語〉諸作品に関する研究でもある。

物語についての従来の研究は、ほとんど歌物語・作り物語・歴史物語・説話集・軍記物語とジャンルごとに行われてきた。その姿勢と方法は物語の本性への直視を怠り全体への展望を失っているのではないかとの反省に立ち、書かれた作品ばかりでなく、語られた物語、物語が語られることを視野に収めて、物語の総体を問おうとするものである。Ⅰ～Ⅸに分かれ、Ⅰが総論、Ⅱ～Ⅷが各論で物語作品および場における口頭の物語（説話）の分析、Ⅸは絵画との関係を通して言語表現の相から物語の基本的性格を明らかにするものである。

Ⅰ 〈物語の場〉と〈場の物語〉 ここでは、物語というものが成立する条件を検討し、物語作品を扱う基本的な立場と方法を提示する。

物語は、語り手と聞き手が座を同じくし、何らかの素材が選択されて言語行為が営まれるところに成立する。語り手・聞き手・素材は物語成立の条件であり、三条件は相互に規定し合う関係にある。すなわち、まず語り手は聞き手の関心に配慮して素材を選択する。一方、人は素材の如何によって聞き手として場に参入もすれば、退出もする。また、聞き

手が進んで素材を選び、それについて最もよく語るであろう語り手を指名することもある。このような三条件の相互規定的な関係を〈物語の場〉と呼ぶ。〈物語の場〉は、語り手の数、語り手と聞き手との関係、それに規定される物語の進行方法を指標とすれば四型に分類される。語り手が一人の場合を「独白」、語り手が二人の場合を「対話」、語り手が三人以上でそれぞれの物語が完結的である場合を「巡談」、非完結的である場合を「雑談」とする。

あらゆる物語は場に依拠して成立し、場を通じて実現されるから、書かれた物語もまた上記三条件を備えている。そして、語り手と聞き手による「語り－聞く」関係を本文化した作品を〈場の物語〉と呼ぶ。〈場の物語〉作品あるいは一部に〈物語の場〉を持つ作品を読み解くうえで、〈物語の場〉を四分類する上記の観点があることは、宝物集をはじめ諸作品の検討を通じて確かめられる。また、〈場の物語〉は、日常に成立する談話の場、説法の場、漢籍・仏典・和歌等の講釈の場のほか、仏典や漢籍の叙述形式を踏襲してもいる。

Ⅱ 堤中納言物語『このついで』論 これは、短編物語集の堤中納言物語の一編『このついで』を〈物語の場〉という観点から読み解くものである。この作品は、後の前で三人の語り手によって語られた物語が本文化されている。三人の物語はそれぞれ完結的で「巡談」の形式であるが、この場は当時の「巡の物語」の作品化であり、語りの実態を踏まえた構成を備えるとともに、先行物語諸作品を再構成してみせたものである。

Ⅲ 大鏡 ここでは、「鏡もの」の源流に位置する大鏡の作品構造を読み解くとともに、語り手たちの性格とその原型、題号について論ずる。大鏡は大宅世継、夏山繁樹、繁樹の妻という超高齢の語り手たちが、三十歳ほどの青侍を聞き手に「昔物語」を語る物語である。その作品構造の由来についてさまざまな説が唱えられてきたが、それぞれに妥当性がある。ここでは、釈迦の説法の場としての経典特に法華経に倣っているという観点に立って読解を進める。すると、大鏡は単に法華経を踏まえるだけでなく、変形を施し滑稽味を加えて批評的な引用がなされていると認められる。

また、大宅世継の名は天皇の位の永続性を、夏山繁樹の名は家門の繁栄特に藤原氏の繁栄の意を響かせるとともに、みずから鏡と名乗るのは歴史の真実を曇りなく写し出すものであるとともに、神仏の化身であったからである。さらに、大鏡には白居易の「百鍊鏡」が引用され、中国的鏡鑑の観念を踏まえて人間と歴史がとらえられている。

Ⅳ 今鏡〈物語の場〉—擬菩提樹の陰 これは、今鏡がさまざまな点で大鏡を受けて作られていること、語り手の老女には大鏡の繁樹の妻、玉造小町壮衰書の老女像が継承されていること、樹木の陰で物語が行われるのは、未来世に弥勒菩薩が菩提樹の下で成道し説法することと関連づけるためであったことを明らかにしている。

Ⅴ 無名草子 ここでは〈場の物語〉としての無名草子の作品構造を分析する。無名草子は、聞き手を〈物語の場〉へ導く道行文、本題が始まる前に「第一に捨てがたきふし」

論を置く点に特徴がある。また、女たちによる〈物語の場〉は当時実際に行われていた論議の場を踏まえるとともに、大鏡・今鏡・宝物集の引用と変形を通じて、精緻な構成と叙述を備えている。〈場の物語〉としての成熟と到達点を示すものといえよう。

VI 仏教説話と場 ここでは、説法における物語（説話）の語られ方を検討し、これを説話集の編纂と関連づけて分析する。古代・中世の日本の説話と説話集の多くは、漢訳経典および唐土の仏教説話集を受容することを通して形成された。経典等の説話と中国説話が布教活動の場で譬喩・因縁・例証として語られ、あるいは日本の説話として翻案され、口頭伝承として流布し、それらはまた説話集に採録された。説話は説話集と説法の場を往還する。説法の場では天竺・震旦・本朝三国の説話を一組にして提示することがしばしば行われる。この方法は、宝物集の〈物語の場〉において命題の例証として三国の事例を挙げる叙述、三国伝記において梵語坊・漢字郎・和阿弥の三人が交替で天竺・震旦・本朝の説話を「巡談」で語り継ぐ構成に應用されている。

VII 今昔物語集の言語行為再説—編纂・説話・表現 これは、今昔物語集を〈場の物語〉と見なしてその作品構造を分析するものである。今昔物語集は、各説話が「今昔」に始まり「トナム語り伝へタルトヤ」で結ばれ、説話を次々と語り継ぐ場に擬せられている。しかし、それは流動し続ける〈物語の場〉そのものではなく、編纂されたものである。このことに留意して、言語・説話・説話集の水準において表現行為・説話行為・編纂行為が相互に支え合い背き合いつつ営まれ、集として生成していく様相を原理的に分析した。

VIII 宇治拾遺物語 ここでは、宇治拾遺物語を〈場の物語〉としてその作品構造および表現の方法を読み解く。宇治拾遺物語は、源隆国の宇治大納言物語を継承するという序文を持つ。これを踏まえると、宇治拾遺物語は、隆国が物語集を編むために上中下の人々に物語を一つずつ語らせたという〈物語の場〉すなわち「巡談」の方法に擬して書かれ、編まれていると見なされる。こうした観点に立てば、宇治拾遺物語の説話配列は、前に語られた物語を受けて類似の、あるいは対照的な物語が語り継がれる様相を模したものであり、それぞれの説話の構成と表現も語りの方法を応用しつつ、洗練された作品として高度な達成を成し遂げている。

IX 絵と物語 ここは、絵画をめぐる言語表現の諸相を分析して物語の本性を表現の側面から明らかにするものである。平安時代の物語と屏風絵および屏風歌とは、素材・発想・表現において共通するところが多いことに着目して、和歌と絵柄、絵柄を説明する歌集の詞書と物語の叙述とのかかわりを検討し、絵と歌の総合芸術としての屏風の鑑賞法に説き及ぶ。そして、物語が屏風絵から生まれたとはいえないが、両者は貴族社会の共通の想像力にはぐくまれたと認められる。また、道成寺蔵道成寺縁起絵巻の絵・画中詞・詞章の関係を分析し、絵巻・絵本に書かれた文字言語は、登場人物の科白、非時制の絵解、「けり」体の物語の三種から成ることを析出した。